

2011年6月まで全世界人口は6,972,108,166人に推定されています。毎日生まれる人は227,881人で、毎日この世を去る人は99,568人だそうです。いまなお様々なやまい、交通事故、戦争、台風、地震、災害などによって多くの人々が死んでいるし、これからも続くでしょう。死と言うのは老若男女(ろうにやくなんによ)を問わず、貧富の貴賤(きせん)を問わず、時と場所を問わず、予告(よこく)もなしにやってきます。それにもかかわらず人々は死と言うのは自分とは関係ない他人事のように考えたり、死について考えようとしません。しかし、死というのは決して他人の話ではなく我々みんなが例外なくかならず体験されるべき現実です。神様が呼べばだれも変えることも避けることもできません。そういうわけで聖書は死についてこのように言います。

第一列王記 2:1-2 に“**ダビデの死ぬ日が近づいた時、彼は息子ソロモンに次のように言いつけた。「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。」**”死と言うのは世のすべての人の行く道だと言われているし、ヘブル人への手紙9:27 では“人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように”と言って、だれも避けることのできないことだと言われました。一言で言うすべての人は死にます。

そういうわけで伝道者の書 7:2 に“**祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい、そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者が、それを心に留めるようになるからだ。**”とされています。これはつまり神様は我々が死という課題を考え、死を備えることを望んでおられると言う意味でもあります。なぜなら、喪中の家に行く自分の死について考えるようになり、死を考えることは死後にある神様の裁きを考え、神様のさばきを考える人はいつか一度の人生を終えた後かならず、神様の御前に立つ時のため準備をする人生を送ることができるからです。よく人々は死んだらすべてが終わりだと言いますが、決してそうではありません。創造主である神様が定められた基本的な真理は蒔かれた分を刈り取るということです。人々はこの世にいる間、どのように生きたのかかならず神様に問われます。しかし、死と死後にある神様のさばきというのは人の頭で理解しようとも経験にしても分からず、ただ聖書のみがその答えを教えてください。なぜなら神様は人間の生死を治めておられ、その治める方法を聖書に記録されたからです。ですから、いずれ、かならず死ぬことが定まっている人間は聖書を通して死と未来について学び、準備することはとても賢いことです。

今日の聖書本文では人生において一番大切なことが何であるかを教えてください。聖書で人生とは何か様々な比喻で説明されています。ヤコブの手紙 4:14 で“**あなたがたには、明日のことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。**”、詩篇 103:15 では“**人の日は、草のよう。野の花のように咲く。**”、創世記 47:9、第一歴代誌 29:15、第一ペテロ 1:1、2:11 では“**人生は旅路の旅人のようだ**”と言われました。私たちに旅人だと言われたのはこの世に生きている間、この地上のことを目指さないで、やがて戻る神様の御国を慕い求め準備すべきであるという意味です。そういうわけで本文 13節で“**これらの人々はみな … 地上では旅人であり、寄留者であることを告白していたのです。**”信仰の先輩たちはそのように生きていたのです。

すると旅人のような我々はこれからの人生、そして残りの人生をどのように過ごせばいいのでしょうか？

1. 生きておられる神様の御前でおそれかしこんで生きなければなりません。

第一ペテロ 1:17 で“**また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。**”と言われました。

ここで“**恐れかしこんで過ごしなさい**”という意味は本国を離れ、他国やほかの地方に行く生活慣習や文化が違うため、失礼なことや変に思われてしまいやすいので、気をつけなければならないということです。

例) ある牧師先生のアメリカ生活へのエピソード

このようにイエスを信じている人々はこの世に生きている間、気をつけなければなりません。

なぜならイエスを信じる人々が過ちを犯してしまったら神様の栄光を隠してしまうからです。

2. 肉体の情欲を制御し、自制することを学ぶ必要があります。

第一ペテロ 2:11 “**愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。**”と言われました。

ここで、“**愛する者たちよ。**”という言葉はギリシャ文化において特別に注意を集める時によく使われていてかならず守るべきであることを意味します。そして“**旅人であり寄留者であるあなたがた**”と言われたのはイエスを信じている人々はこの世に属したのではなく天に属されている者であるという意味です。これをピリピ人への手紙 3:20 で“**私たちの国籍は天にあります。**”と表しました。ですから我々はこの地には住んでいます、我々の所属はこの地ではなく神の国ですので、この世の文化と風習に従って生きてはならないこととなります。

“**肉体の情欲**”というのは男女の間の性的な欲望と物質への執着する欲を言います。ところが、なぜいろんな欲の中で、**肉体の情欲**つまり、性欲と物欲を制御するようと言われたのでしょうか。肉体の情欲はきりがないからです。そしてその結末はそれを手に入れるために尊い人生のすべてを費やしてしまい、結局はむなしくさせるからです。

たとえばイスラエルの王だったソロモンは人類の歴史において最高の富と栄華をきわめていた人でした。ソロモン王は七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがあり、この世で一番よい物、一番尊い物を全部手に入れて、味わいましたが、それをとおして、まことの満足を得ることができず、むしろむなしいと言いました。これを言い換えると、肉体の情欲はきりがなくその結末はむなしいことです。

伝道者の書 2:3-11 をみて見て下さい。彼はこのように告白しています。“私は心の中で、私の心は知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけようと考えた。人の子が短い一生の間、天の下であることについて、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていようと考えた。私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。木の茂った森を潤すために池を造った。私は男女の奴隷を得た。私には家で生まれた奴隷があった。私には、私より先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊があった。私はまた、銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた。私は男女の歌うたいをつくり、人の子らの快樂である多くのそばめを手に入れた。私は、私より先にエルサレムにいただれよりも偉大な者となった。しかも、私の知恵は私から離れなかった。私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしなことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。”と告白しました。一言で言うと、ソロモンはあらゆる欲を全部手に入れましたが、それでは決して心に真の満足を得ず、さらなるむなしさを感じたと言うことです。

その理由を伝道者の書 1:8 では“すべてのことはものうい。人は語ることさえできない。目はみて飽きることもなく、耳は聞いて満ち足りることもない。”と言いました。そして、肉の欲は我々の魂を滅ぼそうと絶えず、誘惑し、惑わしているからです。これを使徒パウロはローマ人への手紙 7:24 で“私は本当にみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。”と言いました。

ここで、“死のからだ”という言葉はローマ時代の恐ろしいある死刑執行法の一つとして、凶悪な犯罪者を死刑させる時すでに死んだ人の死体と一緒に縛って、生きている人は下において死体を上において死んだ遺体からくさった水が流れ、共に腐らせて死なせるととても恐ろしいやり方でした。これは人の心にはきよく神様の御心に従って生きようとしている心と肉の欲にしたがって生きたがる心がともに戦っているという意味です。ですから、当然肉の欲を制御しなければ、神様に逆らう生き方になってしまいがちです。

マタイの福音書 6:24 に“だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。”そして、ヤコブの手紙 1:7-8 では二心のある人には神様に求めているものをいただけないとされました。

するとどうすれば肉の欲を制御することができるのでしょうか。

1) 欲張りをしてはいけません。

第一テモテ 6:7-8 には“私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。”と書かれています。

いずれにしろ、我々はこの世を去り、その時は何も持っていくことも出来ないの、この世にいる間、もっと持とうと欲張る必要もないということです。これを違う言い方ですと、イエスを信じている人々はこの世にいる間、やりたいことを全部やろうとしてもいけません。食べたいからといって全部食べてもいけないし、見たいからといって全部みようとしなくても、行きたいからといって全部行こうとしないこと、やりたいからといって全部やろうともしてもけません。神の御国と栄光のために全部やろうとしないで忍ぶこともイエス様を信じる生活であり、それがまさに肉の欲を制御する基本の基本です。

2) 良い行いをしなければなりません。

第一ペテロ 2:12 で“異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。”とされました。

腐ったゆりは雑草(ごっそう)よりも役に立てません。イエスを信じているといいながら肉の欲を制御しないで、放蕩し、欲張りの自己中心的な生き方は未信者よりも認められません。イエス様はマタイの福音書 5:13 で“あなたがたは地の塩です。もし塩がしおけをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。”とされました。そしてある人たちは悪を行なわないで、ほかの人に害を与えさなければと言っています。しかし、ヤコブの手紙 4:17 では“なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。”とされました。

ですから、罪を犯さないことに満足しないで、さらに積極的に善を行なうことにより世の光としての人生になるように目指すべきだと信じます。

3. 我々の本来の故郷である御国を慕い求めながら生きるべきです。

本文 13-14 節で“これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。”とされました。

これを違うように言い表すと、異郷で住んでいる人々は故郷を恋しがります。もちろん我々は行こうと思えば、いくらでも故郷に行けますので、故郷に対してそんなに恋しがりません。しかし、外国で移民生活をしている人々は故郷に対する恋しさのあまりそれが病気になる場合があります。ホームシックと言われていますが。

これを“懐郷病(かいきょうびょう)”と言いますが、私のある知り合いの先生はアメリカに住んでいたとき韓国は山が多いのに、アメリカの東地域は山がなかったため、山が恋しくて泣いたと言う話を聞いたことがあります。

イエスを信じている人々はこの地上に住んではいますが、神の御国を故郷として恋しがりながら生きなければなりません。これはこの地上のことに執着しないで、神様の御言葉、神様の望まれることなら、喜んで従えることを意味します。御国はかならず存在していて、しばらくの間の旅路の人生を終えると、みな父なる神の御国に戻れる時がやがて来るでしょう。みなさん! 父なる神の家、御国、天国はかならずあります。(黙示録 7:9-17,21:1-5 を読んで見て下さい。)

ヨハネの黙示録 7:13-17 (Revelation):【長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」と言った。そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼ら

は、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。】

ヨハネの黙示録 21:1-5(Revelation)

【また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。】

メッセージを終らせませす。今日我々が覚えるべきことがあります。人生は一度しかなく、アンコールはありません。そういうわけで“一生”だと表すのです。大切なのは人生は一度しかありませんので、ためしにやってみるほど余裕がありません。つまり、このようにも生きてみて、あのようにも生きてみた後、“あ、このように生きるべきだったのだ。”というほどの余裕がありません。これを言い換えると、この世にはいろんな種類の宗教があるが、この宗教も信じてみて、あの宗教も信じてみて、全部経験してみた後、“ああ! この宗教が正しいのだ”と結論を出してその宗教を信仰するほど余裕がありません。なぜなら詩篇 90:10 に“私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。”そして詩篇 39:5 では“ご覧下さい。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んな時でも、まったくむなししいものです。”と言われたからです。

一言で、人生はあまりにも短すぎます。みなさんは旅人のような人生をどのように歩んでいるのでしょうか。

イエスキリストを信じることと神様の御言葉がおろかに見え、神様の御言葉のどおりに従って生きるとなぜか損しているようにみえても、それにもかかわらず、従って生きることは旅人のような人生であることを認めることであり、故郷である御国を恋しがて生きることです。神様はこのような人々を通して新しい歴史を書かれていけます。

愛する信徒のみなさん!

この世の人々からは愚かに見えたりするかもしれませんが、イエスキリストを信じる信仰によって生き、神様の御言葉には絶対従い、故郷を恋しがて感謝と喜びをもって生きる神様の祝福の主人公となりますようお祈り申し上げます。アーメン!